ピントリッキオによる「ボルジアの間」の肖像画とパトロンの記憶

永井裕子　（日本学術振興会特別研究員 PD・九州大学大学院人文科学研究院）

ベルナルディーノ・ディ・ベット（1456 頃−1513）、通称ピントリッキオは、教皇庁を中心とするローマやウンブリア地方などで活躍し、各地の教会堂などで壁画装飾事業を行ったルネサンスの画家である。本発表では、この画家の代表作ヴァチカン宮殿「ボルジアの間」に描かれたとされる肖像画を考察の対象とする。この教皇と親族のための住居の壁面には、教皇一族ボルジア家とその周辺の人々が描かれていると言われてきた。肖像主の特徴をよく捉えたアレクサンデル６世の肖像画については、教皇を象徴する持物や他の肖像作品との比較から人物特定が可能であるが、それ以外の人物像の同定については、具体的な証拠が示されたことはなく推測の域を出ていない。本発表は、肖像画とされるフレスコ断片の分析と肖像に関する史料考察を通して、これらの肖像とされてきた人物像の同定が、ボルジア家に対する後世の風説と混同の結果であることを示す。

まず、教皇の愛人の扮装肖像画であるとされた聖母を描いたフレスコ断片について論じる。ヴァザーリの『列伝』によると、ボルジアの間には教皇の愛人ジュリア・ファルネーゼに似せた聖母像が描かれており、これは近年発見されたフレスコ断片であることが確認された。しかし、この聖母の容貌はピントリッキオが描いた他の聖母像と一致しており、ジュリア個人をモデルとした肖像とは考え難い。ボルジア家の放埒さに対する否定的イメージがこの絵に重ねられ、結果的に破壊され断片となったのだが、その原因としてヴァザーリ以前からこの聖母を教皇の愛人像だとする言説が蔓延していたことを指摘する。

ボルジアの間に教皇周辺の人々の肖像が描かれたと考えられるようになった理由の一つとして、教皇がピントリッキオに描かせたサンタンジェロ城の連作画の存在があげられる。ヴァチカン宮殿の壁画完成後、ピントリッキオは宮殿に隣接するこの要塞に、教皇とフランス王シャルル８世の一連の接見場面を描いた。現存しないこの壁画について言及したヴァザーリなどの言説によれば、各場面には教皇と要人の他に、息子チェーザレ・ボルジアと兄弟姉妹が描かれていたとされている。ボルジア家周辺の人々を描いたこの失われたサンタンジェロ城の壁画の記憶と、ボルジアの間の壁画の混同によって、後者の中に肖像が多く描かれたと考えられるようになった可能性が高い。

ボルジアの間の壁画は、あるイメージが後世の言説と混同によって本来とは異なる意味合いを持ち、芸術家よりも注文主の評価が作品に影響を与える事例を示している。このように、作品の毀誉褒貶は芸術家とは無関係になされたが、この事実は肖像分野における画家の過小評価に結びつくものではない。アレクサンデル６世像で見せたピントリッキオ作品の優れた肖像性が、他の人物像も肖像画だと解釈させたのであり、その意味において、本発表は肖像画家としてのピントリッキオを再評価するものである。